



うぐいすの石笛

【その1】

作:近藤せいけん



うぐいすの石笛 その一

清川村宮ヶ瀬湖のほとり、一人の若者が
どこか寂しそうに、湖を見つめ、佇む。

早春の頃、どこかで、うぐいすが鳴いている。

ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ 心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色である。

ふっと、若者が釣り人がいるのに気がついた。 白髪の高い白ひげの老人。
近づいて声をかけた。

「釣れますか・・・」「・・・」

返事はない

少し時があいて

「若者 おまえは何を悩んでいる・・・」

「え・・・わたしですか？」

「そうじゃ おまえじゃ」

「どうして 悩んでいると解かるのですか」

「うふ ふふ」

「おまえの人生の悩み、生きかたの問題じゃな 解かるよ」

「ええ～本当ですか」

「話をしたいのなら、聞いてしんぜよう」

若者は見知らぬ老人に、驚きながら興味を持った。

この老人に、何か魅かれるものを感じた。

聞いてもらいたいと言う、衝動にかられた。

「聞いてもらえますか・・・」

白ひげの不思議な老人は静かにうなずいた。

「大学を出ましたが、就職が決まらず

毎日がわびしく むなしい」

「私はこの近くの煤ヶ谷に、老いた両親がおり、いい会社に入ることを、楽しみにしております」

「期待を裏切って、もう二年が過ぎようとしています」

「最近 俺は何のために、生きているのだろう 」

「どうして、俺の人生は上向かないのか・・・」

「俺はどうして、幸運から見放されているのだろう」

「いろんな事が、毎日頭に浮かび、眠れぬ夜 日々を過ごしています」

白ひげの老人は静かに聞いていた。

若者が話し終えるのを、じっと待つ

老人がおもむろに口をひらいた。

「おまえは この人生で 何をしたいのじゃ」

「どんな自分になりたいのか」

老人は若者の顔を見た

うつむきかげんにして、若者は考えた。

「そうやって 人生を考えたことはなかった」

「俺は何になりたいのか、自分でも解からない」

ふっと～息をはき、答えを見つけようとした。

でも 何も浮かんでこなかった。

白ひげの老人は、若者を見つめていた。

「そうか 何も浮かばないか・・・」

「そうか・・・」

宮ヶ瀬湖の湖上を渡る風は、春風の甘い香りを運び、優しく若者をつつんでいた。

老人は立ち上がり、若者に告げた

「また七日後、この場所で会おう。 おまえが何になりたいか、もう一度、聞こう」

「おまえが よければじゃがなあ～」

「来る こないは おまえ次第 じゃ～」

若者が下を向いた 顔を上げた時 白ひげの

老人は忽然（こつぜん）と消えていた。

ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ

うぐいすの美しい鳴き声だけが、響いていた。